重修真書太閤記

九編

五

へ13
459
85

へ13特
門文庫
459
巻 85

消

重修眞書太閤記九編卷之十三

霧坂城中軍評定の事

并中川秀春蜂屋塩川霧坂發向の事

佐久間久右衛門安次同源六實政両人ハ叔父粉川法印三智とたのミ紀伊大和河内和泉摂津の際々〻〻居たる諸浪人とうゝ催ふゝ又ハ村々の草創ゐんとていひて肘を張拳を握るゝの共を取立て七八百の勢ゝ及ひゝうハ河内國霧坂の城の容子を伺ひけるゝ羽柴三左衛門尉ハ臆病ゝして軍畧とゐゝく士卒驕りて油断をうと聞えゝうハ價

同攻會印

使として三左衛門尉と誘引さいさいその虚に乗じてやをやと城を乗取佐久間兄弟い佐太の杜に籠り宝寺より帰る路をさいさいと戦ふて従者と打ちさ一少一〻兄玄蕃と誅さる叔父勝家と滅わさと一遺恨とらるけつとも偶計策によりて一城を得たりしの機に乗じて当國長野烏帽子形の城を乗取河内國と一圓に押領し賤ヶ嶽まて戰死をしの共の供養にをくやとおのひ立一らいまつ城中一圓に集會し佐太の杜の労とやをめんと佐久間兄弟上座して貴崎主膳下掛兵庫村井長左衛門カ石小平太杉彈正

左衛門鷺岡十郎兵衛山谷伴太夫以下一同に居ふう之勝軍の酒宴と催ふ一諸士の心と慰めさその打ち佐久間久右衛門申けるいとの〻の骨折よりう一戰の上に勝利と得敵の大将とを打め一つとも佐原清右衛門父子并に東条武大夫を打取たとい賤ヶ岳の恨もをこ一心地をれとも猶おのひめ〻をい北陸道まて惣管領と仰られ越前一國の主たうし柴田の家い滅亡し我々かとも錐を立るわとの地たに持ふい朝夕の設もなむふ〻乞食のさまして此身と果さんとをるとの口惜さたとへと取るめのなり抑當國長野烏帽

子形の城主織田源五郎殿へ故右大臣殿の御弟ふ
さい我等ら主人の連枝よりまをとも秀吉よ諂
ひあつと顔ら〳〵〳〵此度勝軍の競よりを短兵
急よ攻たらんよへ一時ともら〳〵〳〵〳〵忽よ
城を開て落あつへ〳〵然らい當國い全く我等ら領
知となるへ〳〵そまをうり隣國よりこと結ひ本と
めさく〳〵根を深く〳〵て秀吉よ向ふへ〳〵存ぞるな
う因てい面々の助力たのこ入と申げまい力石小
平太村井長左衛門山谷伴大夫ふとい〳〵逸雄の若
ののとも勇こたちたれ究竟の計畧なりおのころ
〳〵といつまも只今打立んとなりける所へ

粉川法印いて來り今日勝軍の酒宴と聞てとく〳〵ふ
罷越らやと存ひへとも若殿原の老法師をいと
いまあつとのやと存付て遲參しといなり然るよ
いつまもい何方へ打出むつるやと不審へ佐久間
源六そく出て此評定いつさ御聞よ入ヒい佐太の
杜の勝軍のいさといよ乘て源五郎殿と追落し奉
う當國と全く所務をんとの事すといと申げまへ
法印莞爾笑ひいうふも勇々敷とさすらさ軍立近
頃感し入てひたく〳〵退て愚案と廻しひよ此謀よ
とよ宜めつ〳〵危くあるく其故いうよといふよ烏
帽子形よ向らんとて勢と二ひよ分ひらん時誰ら

殘りて當城を守り申へき若さの〳〵習ひ城を攻るといふうこゝに守るといいとひゆさをいつまもつゝまと攻口よりこゝたゝんその跡へ秀吉寄來りゆゑん時何ゝとなれと防き申へき其上ゝ當城と安々と攻取ゆひしも備ふき處へ寄つまいなり然るゝ羽柴三左衛門尉の誘引出さまして城をうゝゝゝまゝゝと烏帽子形ゝとも知たまいなと城を守るとも第一とゝゝ佐太の軍ゝも加勢とゝゝて打出さるなまゝ然らハ源五郎殿ハ柔弱ゝゝて相手ゝたらゝとともいへその手の侍少ゝとも五百や六百ハあるへゝそまゝ等ゝ用心ゝて守る處へおゝ寄ていゝゝ勝へきゝ方便やある霧坂と取ゝハ我奇を以て敵の偶をやふりゝなり今烏帽子形へ向ふハ我偶を以て敵の奇と討ふまハ千ゝ一ハも勝へきゝ理ゝゝ其上ゝ御身達とりゝゝと烏帽子形へ向て軍をんゝ城強くゝて一日ゝ落ゝゝゝハ何とゝとる其留主へ秀吉の軍兵一手ハ烏帽子形の後巻をふゝ一手ハ當城へも寄來るへゝ尤様の時の心配もなく軍をせんとハ危ふゝゝ拙僧ゝ軍畧ハいつまゝゝもやつ當城をゝく守ゝ夜々近郷へ働くゝて兵糧を集め玉薬の支度をなゝ其後恐ひを入て秀吉の軍法を探り知その方便ゝゝて又々策と考出ゝ彼

實を以て進むとさへ我虚を以てこれを制をへ
是居なゝ大敵をあしらふ術と云へ若よく秀
吉自身當城へ向ふとあらへそなたをよく妙計あ
う城中八百の勢を二ツに引分五百ハ以て城を守
るへ三百ハひそうに城を出て山崎に向ひ宝寺
と放火をへ秀吉の留守ていあう其狼狽さとろ
んと何計とうしる其上に又施をへく計ハ時に
臨て定むへと云ふ佐久間兄弟も實誤て
う誤てうと後悔し法印の評定に從ふうタ又他
事なく見へよけりそふ城の修復し道々と堀
切ひと植あるひハ大木と切倒しなとして專籠

城の用意とすしける處に法印の出し置た
る忍の者とも立かへりて注進ひるハ三左衛門
尉佐太の森の軍敗とて宝寺へ落行それより當城
を乘取ふし始末有のよ〻に注狀しつるハ秀吉聞
ひいうふも三左衛門尉如ふ思慮なきの左様
の變よあらんと今更驚くへきよあ〻佐久間兄
弟そうの策よあるへと仰らふし処に追
追注進有て粉川法印謀主たるし聞えしうハ左
もあるへ其法印ハ根來ふと密教を學ひ叡山に
登りて顯教を習ひしののぞさてハ棄置りさし急
ふ討手とさし向へ誰うハ然るへうんと思惟

あらけるゝ折〳〵も蜂屋出羽守塩川伯耆守御前よ
あゝ〳〵を御覽をゝまと其方両人霧坂よ駈向ひ責取
ゝゝへ〳〵と仰らまけるる由と聞中川平右衛門尉則
清ちゝうよ難さ申けるい霧坂を取〳〵のの佐久間
兄弟と承らる又佐太よ於て三左衛門尉を窘め〳〵
も佐久間兄弟の由よいものの〳〵兄玄蕃允い某
う兄瀬平う伐よそいあゝと霧坂の討手某へ仰付
らまいて粉骨と盡〳〵申へゝ由一向よ請申を〳〵
ゝう是も御免の由承らう及ひ然らい勢のわとも
三四十よ及ひ申へゝいい御用心あるへゝいと申け
るよゝう佐久間兄弟とゝゝめ板山谷鷺岡下拠の

人々さそい由々敷大車なゝうゝと烏帽子形へ打
出さゝうゝとさゝやゝ合目と目と見合を心の中よ
法印のいひつることゝ感〳〵け法印い此注進を聞
ゝうさもあるへゝ去なゝう蜂屋塩川中川の三手
よそむゝふといへい秀吉い寄來らさるなるへゝ
あまへゝくよ知つることよ彼を知己と知い百戰百勝
といへゝう敵の計畧よ依て計畧と行ふゝと勇士の常
なゝうされい臨機といひ應變といふゝか軍法の秘
とる處なゝうみゝうよ血氣と頼らゝて軍令を背き謀
なゝくゝて戰場よ臨まへい石と抱ひて淵よ入薪を負
て燒原と過るゝ如〳〵但寄手い既よ近付ぬらんま

つ手配となるとへ〜と大手の木戸へ佐久間久右
衛門貴崎主膳村井長左衛門と大将として四百餘
人とさし添是と守らるゝ搦手へ佐久間源六杖弾
正左衛門尉下撰兵庫を大将として三百餘人をさし
添是と守らを驚岡十郎兵衛山谷伴大夫へ遊軍と
して三百余人を従へ城中を見廻り寄手の様子を
うて働〜と定め法印へ力石小平太以下を召
つれて百騎くらうと引卒し櫓に上りて四方を見
おろし下知を加えんと扣えて其体まことに悠然
として寄手の大軍を少も怖ずを今やかと待
かけしへ不敵なるも又大膽と云へし又塩川蜂屋へ

霧坂の討手を蒙りて打立んとなりける處へ
大将の命ありて御前へめされ夜叉の伽に加えら
れ大醉して前後も知ず中川平右衛門へ討手を願
ふといへども既に蜂屋塩川に仰付られたるへと
もを取返して中川に仰られをとて大将猶預
しへへ中川へ券を握りて河州の空を長目居た
うして烏帽子形の注進まことに浪を打て宝寺
の門前をくらと寄来るを中川平右衛門後日
いとまもなくも只今眼前に狼藉をらくのを其
まゝ余所に見へけんやいなく打立んと家中の兵士
を催促しけるに志津岳にて父と討を又へ兄弟を

矢ひゝ恨を報ゝんと忽ゝ馳集るの一千余人ゝ
や打立て河州へ發向ゝ又蜂屋出羽守ハ千二百余
人塩川伯耆守ハ千八百余人合をて三千余騎の〳〵
ふめんて推寄たり霧坂ゝをハ粉川法印擣ゝう寄
手の体を見つのりて大石大木を投ゝけく防さけ
るわとゝ寄手も多く手を負て進ミうゝ孫し處ゝ中
川ゝ勢の中ゝ小泉團右衛門安西助十郎一番ゝ塀
ゝ取付名乗ゝけて戰ひ〳〵ゝも法印の下知ゝけ
〳〵まつて勿々攻破ゝうゝ平右衛門尉ゝを
と引揚蜂屋ゝゆつる蜂屋出羽守羽柴三左衛門尉
引替りて攻けるゝ城中ゝハ大臆病の羽柴三左

衛門尉殿我等ゝ手並ハ佐太ゝを大形知〳〵
めゝつゝんゝまゝりぞゝふ寄ゝふこゝゝと
て咄と笑ふ三左衛門尉口惜とおゝへどゝも
城方強けれゝば一先引取て息を繼せゝ支度
をゝて寄んとゝ

大谷慶松謀て城兵を偽引出ゝ事 并佐久間貴崎抜撤追討の事

中川塩川蜂屋の勢合をて四千餘人霧坂の城を圍
ミ只一時ゝ攻落んとゝなゝけるゝ城中ゝハ粉川
法印防禦の術とつゝ〳〵木石を投てゝ是を障へた
たゝゝ處とさゝつめ引ゝめ射出ゝ大筒小筒筒先

とそろ〳〵打出しける様子もなく中川ゝ先陣も引退き蜂屋塩川も攻おくられて見えたりけり理や法印ハ博學宏才といふ中にも學ハ孫呉の肺肝をあつめ六韜三畧の深奥に達したハ奇と正となり正と奇となり進退從横自在なるハ四千余人の寄手四五日を經ともなく仕出したるともなく從ようち詠めて居たりける後に秀吉の小性立に大谷慶松吉隆といふものの此戰場の目付として下向をしゝ中川蜂屋塩川羽柴の四人に向ひ諸大将の骨折ぶり所少もとゞ間なくひ某の短才愚案をめぐらしゝ城ハ堅固の要害にして兵糧ハ澤山にして

中々以て一月二月に盡る様子もなしいろゝもして佐久間兄弟と偽引出し其虚に乗て城に付入ハゝゆと存ハ如何と申けるハ中川塩川蜂屋羽柴の大将達ハの計ひとよろこびへて如何にして偽引申べきや其術いかゝと問けるハ大谷左ハ如斯なりゝ謀ハ密なるを以てよしと云翌日早天より城責よりゝ四手一同に立けるとハいへ城中にハ例の大木大石を投うめく防さけるよりなりけん寄手の後陣たちまち崩たちて右往左往と散亂しつるよりゝ城に付しものも心なのゝ八四五町とりも引退く城中にてハ是を見

て佐久間兄弟眞先に切て出て是を追んと勇を立
けるを粉川法印おしとゞめくゝめ申ふか人々に
寄手の崩と立しい子細あるへしいなと云昨日
も一昨日も忍ひの者に探らせし処寄手の陣中一
同に氣をふるゝて見ゆるとも更に違變のあ
ゝき由なし左と思い必定計策して面々をさそ
ひ出さん為と知る淺々しき智計なりそとこのる
へき法印ゝゝと云てさひしゝ是を製しけと い
佐久間兄弟も實のと云て静まりぬ蜂屋塩川中川
の人々大谷う勧めるあう敵を偽引けとも粉川
法印う此方の計を知て追をさると見へたり然

らん陣拂しと引返を体となしあへ必定追撃うふ
らんそれに付塩川と羽柴と搦手に伏て城中へ
のり入あへしへ中川蜂屋い地の理を考へ引返し
引つゝんて討あへと手配うと定め大谷い二十騎
ばかりうて東の山にのり虚實によりて相圖を
なすへしと評定し夜中に陣拂ひして引退さぬ城
中すてい夜明て見とさをい寄手の陣中一人も見
えぬこゝふ引拂ひし跡ふとい貴崎主膳村井長左衛
門佐久間兄弟に向て申けるい昨日寄手の陣中さ
こあしつるに今朝うとい一人ものこらぬ陣拂ひ
したう是い京都山崎に異變の作りしさなくい

當國より一揆すとも發しう不思議の事なりいつまでも跡と慕ふてさまと討へし法印御房より申たらいかろしといいたるまゝ内々りて早々打立ゐへやと勧めけまへ佐久間兄弟元こう血氣よりやり思慮ふかきのなまいひそうよ城を出て寄手の跡をとゝさひけりゆゝとも知ぬ法印い佐久間兄弟貴崎村井を呼けるよいつまも先刻出城をしとて出來らぬ法印大さうよ驚さとい一大事となりたり敵の陣をとゝひしい計策ふるふそまと知として打出たゝんまはかなゝび手痛き目よ逢ふへしとて門番ともを六ゝうしとも甲斐ふしゝ去なのゝゝ救

の兵と出さいあるへゝゝび下撰兵庫山谷伴大夫両人參り向ふて引上ゐへやと云三百余人をさし添て城をいさいそのゝち法印の手配りと嚴重よ沙汰し枚彈正左衛門鷺岡十郎兵衛よ城を守らを力石小平太をめしつゝ三百余人りて城を出て樹深き杜の蔭よりゝゝと居たり然るよ佐久間久右衛門い源六村井長左衛門貴崎主膳い敵の跡を追て馳しりとも敵一人も見えぬい一里ばかりも城とくるゝて如何ともあやしき敵の擧動やとおのふ處よ一聲の鉄炮ひゝくやいるや中川平右衛門三百余人りて関を作り打て出佐久間よ向つゝび佐

久間兄弟得たりやといふよう早く鎗を入れめき叫んで突合たり貴崎村井もあまりの不意に狼狽しつゝとても元くより覺の武士なれば潮の涌如き中川勢に向ひ一足も引ふ引しと恥しめて從横十文字に突つ突まつ戰ふたり中川平右衛門尉は馬りけとゑ賤岳にて兄瀬平をうさしー恨をむらに返さんとやのち付たり佐久間兄弟とゆふ退とと呼て う呼ろう攻ろ〳〵る佐久間久右衛門ひとと聞瀬平を討しい兄の玄蕃なり某は中川に恨を受へと覺なりとその上玄蕃は誅をうる我むと汝に恨ありと云つゝ互に鎗を合を追つうへしつ戰ふわとと佐

久間う勢い小勢るゝとも必死になりてのこ合たう中川勢い多勢を頼こそ突合ふわとに三四町くわう突めへさる平右衛門尉むとをみてとこなるのの共軍いかうとるるのの我を手本になをやと大身の鎗を引提て無二無三に突立ては佐久間うさふ〳〵十四五騎むら〳〵こつと寄來り平右衛門尉をとうさいめて前後左右より突立ともに音に聞えし瀬平う弟なりすゝ〳〵うちに六七騎を突ふを猶も進んて久右衛門尉に目を掛たり佐久間源六ひとと見て兄と討をゝと立ふさうう中川を弓手に引うけ十文字の鎗を上段に付て付入るとと中

川見るまゝ大音あげ其方い佐久間源六まゝゐ拳も
いまゝ固まゝぬ小腕よて某るんとへ向らんとい
たとへのふゝの鬼とのゝやまとさうとまといへ
い源六打ゝひあさまるのかさまゝぬといい秋の
菓の實あるゝや尾張國の佐久間黨右衛門尉う四男
源六實政なう兄玄蕃允いその方の兄瀬平をうつ
今まゝ某汝をうてい對々の軍なうといひつゝ突
出ひ十文字電うも早くゝて手ふもとゝまひう
けうゝの有らと見ゝい影もなゝ無やと見るゝあ
うあゝとたあひさゝる景氣いそ世ふめつらゝ
く見えゝけゝ久右衛門尉い源六と平右衛門尉鑓

と合をて戰ふと見て危ふゝいて助くゝやと兄弟の
互ゝおのゝ恩愛の厚ゝ情と懇なう平右衛門尉ひ
らうゝと打笑ひあの日頃其方ともゝめくゝ合打
取て兄瀬平清秀の幽魂ゝ供えゝやとおのひつる
念願届いて今日といゝゝ今日両人ゝ面を合をる嬉
しさゝ其方共もさゝそう尾刎の佐久間と名乗るか
らい一足も引ふ引をもをゝと三尺余うの大身の
鑓大和鍛冶の金房隼人う鍛ひたる刃廣ゝ大業物
只一さゝと進ゝうると源六う十文字久右衛門尉
い素鑓ゝをゝ突合と平右衛門尉の
身ゝゝやうゝ氣逸くゝ前後左右ゝうけめくゝるその

形〻ふもとさほ〻雲よりのぼる龍の早き如く風をたゝとる帝のくけ〻さよ似て七十餘合よ及へとも勝負つゝ〻佐久間兄弟寄てハ離ときとうとて又かけ〻をつ時をうつ〻て戰ふと村井長左衛門くるゝうよ見て鞭を合を馳来り平右衛門尉よ突めゝる平右衛門尉ハ三人を相手よとゝ〻ゝもゝとゝ鑓の名譽ハ今ゝの時ゝ佐久ゝ傳ゝ〻秘術ハゝゝとゝたゝゝ立ゝハ三人とも〻請身よなるゝゝハ口惜と佐久間兄弟村井もともよふゝとゝ〻付入て面もふ〻〻火水よなゝと戰ふゝゝ

重修眞書太閤九編卷之十三終

重修眞書太閤記九編卷之十四

佐久間兄弟難戰危急の事
并粉川法印馬術勇猛の事

暴虎馮河死して悔ふきのゝハ我與をゝとハ魯論ゝ載る處誠ゝゝるうゝ佐久間兄弟一己の勇をたのゝ謀をこのまゝ貴崎主膳村井長左衛門とゝもゝ敵を輕んゝ高名をんと深入ゝて叔父粉川法印の庭訓をそむゝ竊ゝ城門を出て中川蜂屋塩川の勢を慕ひ勇〻進んて走中川勢よ追付て中川平右衛門と鑓を合を戰をいとゝ〻實ハ大谷慶松ゝ

計畧よりおちいうしと知さうけるあとうさてけと
中川平右衛門ハ佐久間兄弟ハ天然そふとる勇士あ
えー上手なう佐久間兄弟ハ天然そふとる勇士あ
う追つうへしつ戰ふさま火花をちらしてとさま
しく中川う侍よ安西助十郎小西彈右衛門三百餘
人の勢と率し横合ようー人もあまさしのうさし
と無二無三よ突掛りしうハ佐久間兄弟ものとあ
まー透間もあらハ引くつー霧坂へ帰う入らんと
なしく中川勢あまうふ手ちけく攻付ける
ふのう今ハ是まてなう討死をへしと必死よなう
て突合たう貴崎主膳村井長左衛門佐久間兄弟と

勧めて扳掛し此の如く敵よとうちめらしと全
くて両人の恥辱とれのひしうハ一足も引しと
勇ム進んて村井長左衛門ハ小西彈右衛門と切合
けうう小西ハ若く健うける上よ荒手なう村井ハ
今朝のう数度の合戰よ逢多く敵を打しうハ太刀
ハ打折佩添の太刀も能の如くふうちるしたとハ
鎗と取て突合けるよ鎗とも突折けるようう大手
と弘けて組んしとうしう廻る村井ハ勢高く力あ
くすて強ううけとハ小西ハとを引くつー組とー
組とーと馳違ひしく村井を打んとなしけると村井
いとやくも是とさうう右の腕とさしのへて小西

うあげまくを掻つくこと無手と引ふるる小西ハ引と
なるゝ拂切ゑ切げる太刀村井う肩ううあぢくゝ
めけて切下しうハ村井馬うう眞逆ゑ落けると中
川う侍とも落うさふうて首と取貴崎主膳ハあと
まて手と負ハ惡鬼羅刹の如く荒まうう四尺五寸
の太刀と以て下と打ていてと切竪割横車見る
めゝちゑ十六七人と切ふを三十余人ゑ手と負を
ゝわと上中川う手うて也此のの一人ゑ多く士率
と損をゝことあてめとうゝ孫如何ゑもして此のの
を生捕ゑをんと安西助十郎小西彈右衛左右うう
切てめゝる貴崎ハ安西小西を前後ゑ引うけ莞尓

と笑ひ中川殿の御内の衆ういつとも今朝ううゑ
く働さゑへう實ゑ名譽の人々とおゑえて假名
ハ何といゝゝゝゝゝゝ同ゝ打取首ふゝゝ其名と知
ハ格別ゑ我等う手柄もいちじるゝ名乘ゑゝゝと
追めゝとて安西助十郎左ゝゑ貴殿ハ誰人ど其方
一人ゑ多くの味方と損ゝたうあゝゝゝハ手捕ゑ
捕て首と打んゝゝとや組んと追やはと貴崎ゑれと
聞のの其数ゑひとぬハ名乘とも誰も知ゑゑゝ
霧坂の城を乘取ゝ第一の勇士なうといゝとをゑて
く車たうぬゝゝ但首帳ゑ付ゑゑとさゑ無名の勇
士とありてと勲功の賞の次第ゑめゝとるゝゝけと

へ名と中へ〳〵ゐさへ大和國の住人にて越智の一族に貴崎大夫判官兼康の曾孫貴崎主膳と申のなり鬼神をも欺き松永彈正の志貴山に籠り頃頼まれて一方の旗をい預りしのなり御邊へたゞと呼ぶ〳〵切めくるとい安西助十郎さてい聞及ひし貴崎とのゝ大和摂津い隣國なり定めて我名も知るゐこゝん中川の家中にて安西助十郎なり相手に取て似合なりいさ組て勝負をんと互に近付處へ佐久間兄弟馳来うけるゝゝ又物別となりて安西うけ通さい貴崎い右へ向ひけり然るゝ佐久間源六獅子の子の吼るゝ如く大音聲にて

さ呼び今を限りと切あいけるゝふゝ中川勢も多く切るゐびけらさそ〳〵白けて見えなゞら中川い大勢なり入替〳〵攻たてけるゝふゝて佐久間兄弟も今いゝや危ふく見えけるとゐろ〳〵下掛兵庫山谷伴大夫粉川法印ゞ下知をうけて三百余人面もふゝゞ中川勢に突てかゝるその勢あゝるも大浪の打うゝそゞ如くゝげ〳〵かりけさゞ中川勢も不意に突崩さ也四方へちつと引ゐりぞくその隙に下掛山谷ゞ三百余人佐久間兄弟を引まとひ霧坂さしそひきうゝくその道そぞふ十町あまりも

きたりつゝんと思ふ所向ふ〳〵より蜂屋出羽守千百余人と二手まとけて秋雲の雨を帯たるごとく龍蛇の蟠まるいきをひをなし漸々と寄来りけるを佐久間兄弟も大ゐおどろき前ゐ中川と戦ふて士卒をゐ疲さたり今まこと此大勢に取こめらるゝとても一人も生ん道をなきさりとて引返そべきみもあ〳〵運の窮達ともゐ天の所置なり死をんとしてい生いきんとして死を合戦のつゐなきべたるをいかれを恐をゐれを歎くづき太刀の目釘のつゞくかぎりいきうちゝゝうちなをねところまで腹切

一人手よりふめ〳〵うそと互よいきあ合つゝ山谷伴大夫神戸伊織と真先よたて〳〵三百余人蜂屋う勢よ切てめ〳〵る蜂屋ゐ見て死生〳〵らべの猪武者ようけ合て未方を亡わ〳〵何うをん只鉄炮よて打落をとゐめ替〳〵打とゝめ〳〵らとも越王よ〳〵てくつゐ〳〵らいい山谷伴大夫神戸伊織近々と攻付蜂屋う先手と切くうを蜂屋う勢とも切立らゐ三四町も引退さけきい山谷神戸両人やとゝ〳〵たけう立て鋒〳〵う火と出〳〵て攻戦ふ有さよ天帝修羅の戦もも〳〵やと見えて夥〳〵蜂屋出羽守ゐとを見て鉄炮の上手とえ〳〵て覘ひ打ようをを〳〵う

へ終る山谷神戸鉄炮ゟ中りて戰死を蜂屋ゟ兵と
も大ゟ勇みたち一人も漏をまゝと攻うるゟ
う下掛兵庫ゟ先ゟ進こたちまち佐久間兄弟の
具足と者うへ佐久間兄弟とい雜兵の如くゟ
へ勝ゝとうたる蜂屋ゟ勢へ切て入下掛い聞ふる
勇士なう大勢の中へうけ入是い阿波の三好ゟ仕
へ下掛左近將監ゟ長男ゟ下掛兵庫とゝゟのの
そ誰うもあゝ打物取て我とあのくんのゝ寄合
て太刀の叉うひとたゝ呼ゟ〳〵狂ひ
まゝとい蜂屋出羽守ゟと聞ゟも聞及ひゝ
うそれへ四國ゟそ人の知たる侍を左右なく寄て

過とゟ只遠矢ゟ打取と下知けるゟう足輕も
待も弓鉄炮とそろへとを射たりけるゟ出羽守
まゝ思うへ是ゝとの侍一人ゟ切立ゟ弓鉄を
ゟて是ゟ當〳〵といとてい未代の恥辱な
う誰うある下掛とあゝへ組て勝負をゝう
〳〵と下知ひとい蜂屋ゟ手すゝ日頃手柄を爭ひ
兵とも我討取て高名ゟをんと進けるを佐久
間兄弟下掛兵庫一所ゟ寄て切立突立けるゝ
こゝゟ源六ゟ十文字のゟ鎌と引めさたうゝとと
も源六車とをゝ猛虎の如く荒はう脫兒の如
くゝう廻ひとゝ共蜂屋い大勢入めへ揉立る

味方いくつゝ三百余騎そなも大うゝ討とつ手と負つ兄弟二人も手痛く戰ひしかこゝ兜も打落さるゝて大童今を限りと戰ひけり粉川法印い兄弟の安否心のとなく走来りてあるとみるへ中川蜂屋ろ二千餘騎と佐久間下柵三百余騎朱よりて戰ひ居たり法印とふうよ是と見付叔い中川蜂屋以下ふ誘引さ出さゝとゝぞいてさゝい蹴ちゝて兄弟二人と救ひとつゝへゝと百餘騎轡を並つて駈たうゝい蜂屋勢忽ふ踏たをされ三四十騎い這這の体ゝと十余町を脱たうけり法印ふゝとい目ふもうけど鎗を取て突ゝはるわりさまののよたとくていくくふなゝくるの雲雀の上るゝ如く真一文字ふめけ破り秋の木の葉の散ふ似てむゝくてつと逃ゝくる法印い元来岡崎大坪庵の三祖式部房慶秀の秘とる處軍馬の奥儀と極めたゝい何わと馳ても馬疲ゝと乗人い無雙の勇猛威神力そのくやさとい稲妻たとくと取ふたゝと影い見なゝら手ふも取ゝぬ水の月前うと見ゝい後ふわり右と打い左ふ廻り左を突てい右ふめくゝ浪ふたゝうふ海士小舟林を傳ふ鰐のゝるゝ離ゝゝ藝ふと聲きゝゝい休と實ふ幾内の侍の目と驚うくてと

らさと軍散して後迫もめ〳〵う草すぞ〳〵たりけり蜂屋中川多勢あるとても法印一騎ゑ駈あやまるさまいつまでも中と開いて通しけるい佐久間兄弟下掛兵庫法印ゑ従て聞と出霧坂さ〳〵て引てゆくを中川ゑ手ゑう平右衛門尉例の小西安西引具〳〵てのうとやま〳〵と追掛たゑう法印馬の鼻を引めへ〳〵手ふゑい定めて見つ〳〵んゑあ〳〵笑止の人々や罪つくりといおのへとも拙僧の引導すて此の世の暇と取をてくまんいさゆゑと聲ゑけて蹴立をい名高き大栗毛紀州牧の堪乗なう蜘手めへ〳〵ゑ十文字巴字ゑ追つ井字ゑ返し従横自在の鞍の上目さま

〳〵も亦いさやか〳〵安西助十郎法印ゑ組んと駈よるゑと法印尻目ゑさつとうて推参ある下鶏めと〳〵ゑ聲めろ共突出ゑ穂先の光ゑ〳〵めへやいゑ助十郎ゑ胸板ゑう押付の板まで〳〵さと貫ゑをしめへ何ゑへめつ〳〵たゑるへさそのまま〳〵息たえ死てけゑ小西彈右衛門めふく〳〵と貝ふつく逃出をと法印をゑさゑ鎗取直〳〵ゑけ突ゑ突けをい肩先ふゑ〳〵突をつをとはゑう〳〵の体すて落延たゑ中川平右衛門も今ハ只一人既ゑ危ふ〳〵見えけるを蜂屋ゑ手のめの五六十騎法印ゑうけ向ふを幸とめたへゑ引て息継居たゑう出羽守い法印の挙動を見

て天晴敵や然るべく彼一人を討んとて多く士卒と損ずるも詮なき事なりとて軍を引上げ法印希有なりて必死をのがれ霧坂さして引返す

羽柴塩川霧坂へ入事

并佐久間兄弟粉川法印危難の事

大谷慶松吉隆い諸将と共へ軍配を定め忍びを多く召仕ひ霧坂城中の容子を探る粉川法印出城の後城中へい鷺岡十郎兵衛杖弾正左衛門へ是を守りしかども敵い寄も来らず餘りのことあるさて法印貯へる樽を開きて酒宴をなす士卒いつもの休息しつる由を聞て

とい寂寞の時いつもとうと羽柴三左衛門吉長を追手へ向ひ塩川伯耆守い搦手へ向ひ関の聲と上螺鼓と鳥一攻立げるわとへ城中以の外へ騒動しつゝ寄手の来りしぞ油断しそけうと狼狽しふうら狭間へくとり弓へ鉄炮といめきける處を見とすし寄手のうちへも羽柴三左衛門尉元ろう我城ありたとひ一手すとも取返さい面目なしいくんや塩川う加勢あうう是非へ踏破すべしと無二無三へ攻めうしうい相従ふのの迫も日頃の無念とるげんと火水へなりて攻たりけるわとへ難なく一の木戸と打破り曳々聲を出しとい

入けるに搦手より向ひし塩川も楯とたゝき竹束と突並へ関の聲と上つゝ城の塀と引破り乗入たり城中より名ある侍浪人に佐久間兄弟を付て打て出又粉川法印も従て馳出つるに只今城を残る處の勢とも多くに處々の一揆郷士の類もてそゝ敷のの一人もなうゝうに寄手の城を乗破りと見るやいなや逸足出して落失たりゝめい四百余騎と聞えし兵も今いくや四五十人そうゝふるつるたり鷺岡十郎兵衛杖弾正左衛門尉めく城を破らるてい留守居をし甲斐もなく然とて如斯前またらゝる城兵を何とゝて引やとあてんまつ本

九に入てともかうもなるゝと思ひ定め大手とそゝ本丸へ引のける羽柴塩川の勢ともそゝ間あゝをば攻立けるに丸ふりゝや總軍一同に城中よりこゝ入たり鷺岡杖の両人い本丸に入當城うゝの如く打破しし上い法印よむゝ面もなくとて重代の主君よもあゝば一且の約束ふりうて めうふ大将とたのゝし迫のことなう爰にて戰死をんと益なしいさや身をめゝさんと本丸に貯えさうし金銀おゝ取持て山傳ひよつゝくともなく落ひう然るに力石小平太い法印と共に打出て寄手を目ふうに戰ひけるう法印きつと思案し城

小殘をし枚鷺岡より寄手へ攻らゑ難義なるゝい
うゑもして寄手の後陣へ切かゝり是と枚へとて
百余騎と引分て〳〵けるゝ霧坂近くなるゝ頃
城中より殘をし軍兵落來るゝ行違いうゑゑへ城を
出しぞと問へ皆々出張のその跡へ羽柴三左衛門
塩川伯耆守二千余りうて寄來り手痛く攻けるゝ
ゑう城中必死となりて戰ひし處搦手の山の谷間
ゑう敵しのひ入て攻けゑへ我々も火水となりて
防をしゝ共終へうふくて城ゑう外へ追出さゑを
んゝとあさり爰へて落來りしゝとゑうけゝる
へゑう小平太も大へ驚きなゝゝ此のの共へ紫武

者ゑう枚鷺岡へ何とゝ成けんゑとゝゝ先途を見
て其後へゑゑとあとへゝ様もあるへしとおのひゝ
へし猶進み行てみとへい霧坂へゑゑ羽柴塩川入
のそゝしと見へて獨樂の紋のそゝおしたたり
さてへい落城うゝうひゑたしし枚鷺岡のなり行
へと尋ぬるへ枚へ隨ひし足輕五六人落來りしゝ
いゝうへをして彈正殿へと聞けるへさんゝ彈正
殿鷺岡殿とい城中無勢ゑう持てこえゝゝ一先
落て其後へて計策あるへしとて城の奥なる山越
へ落ゑへうとゑゝさるへふゑう小平太もゑさとて
味方をゝゝへい今へて百余騎あゝし兵士へゑ大半

落て今ハとつつゝ五六十騎ハらを此勢すてい
何事もなく〳〵と又引替〳〵法印ハ行あひ城ハ
そてゝ羽柴ハ攻落さんとてゆと注進しけるハ法印
牙をとゝ口惜や然へ此勢ハて無二無三ハ攻ゝ
う短兵急ハたゝ〳〵と立あい羽柴三左衛門尉とも
追出さてハあるへうゝハ進めゆのゝともと勇め
たて霧坂の大手ハ向ひ関を作る城中すてもをて
や法印帰り来ゝゝを取圍てゝとゝてやと下知
〳〵つゝ弓鉄炮と雨の如くつるべうちハ放ちけ
るとハ法印の勢をとゝ引退く矢玉をさけゝるをハ
ゝ塩合をとゝゝと羽柴塩川一手ハありて駈出

るゝ法印得たりと真先ハ進て切ゝる羽柴勢ハ
法印の馬ハゝけ立らゝと頭を粉割と腰骨を踏折と
三四十人ハ矢庭ハたゝ〳〵て死ーたりけり佐久間
兄弟下掛兵庫力石小平太いつゝも一騎当千の勇
士あり馬ハそゝゝとゝ一騎物あり鞍の達者ハ逐立ら
ゝと獅子の荒〳〵如く醉象の狂ふハ似て駈たて駈た
てゝ〳〵合わとハ城兵多く討とゝ共羽柴塩川ハ
大勢なり一陣破とてハ二陣ハ三陣ハとゝ請取三陣四陣
と操替〳〵攻けるとい法印も佐久間兄弟も切崩〳〵
突崩〳〵ゝ引退りけるゝと塩川伯耆守士卒とゝ引
ゝのゝの共とのゝなく討んとをハ味方の勢も

若干かゝるべし計を以てなりとと討べしと二百余
騎を霧坂の下の在家にかくし置五百余騎にて法
印に向ふ法印かくと見てさしもの共の振舞かなそよ
の世の暇を明て呉んと例の大身の鎗をもて面もふらず
突かゝる塩川と佐久間と渡り合火花をちらして戦へば
羽柴三左衛門尉援け来り法印と佐久間兄弟下掛力石
と真中に取こめ一人も漏さじと攻しかども法印の馬は
かく佐久間が馬も大きく骨太かりしかば塩川羽柴の
勢あまた爰にて多く討れけり然るに塩川は偽て法印を伏
勢の所へ引よせんとなしけるを法印ともかくなきとさとり
我は小勢なるうへに疲れたり敵は大勢なれども荒手

加りたるにかくもなしは引色になるは怪しげなりかならず
計のあるならめとおのおの更に進まねば蜂屋出羽守塩川
伯耆守中川平右衛門尉羽柴三左衛門尉競ひかゝりて采配
をとられしは法印なりとひに佐久間兄弟を真中に引包んで討取
べしと進みける法印馬かけよせ蜂屋出羽守羽柴三左衛門
尉たちまちに承りしと是は粉川寺の法印三智なり去ぬる日
まで霧坂の城を乗取そのうち佐太の森まて三左衛門
尉を窘めたりしも三智が計策なり然るに三智を欺き
て霧坂を取かへしつるは塩川とのとそうろうとあるべしのぞ三智
が手並を見せ申さんとのゝしりと見えしは馬に輪をかけ真一
文字に駈入て塩川羽柴が勢を蹴ちらして踏ちらて散々に揉合

しゝゝ中川平右衛門尉蜂屋出羽守法印を打捕らんと左右よ
う責付しゝゝ法印ととゝよ討つゝゝうけるゝ法印運の強うゝけ
ん忽ゝ二陣の狂風さつとおとゝ来り石と飛し砂を巻あけ
ののとさすゝらさ空の景色陰々とうくさくのう咫尺のわとも
見えこうゝゝ中川羽柴塩川蜂屋の軍勢とも目とあゝのなゝ
我先すゝ迯ちりしゝゝ粉川法印佐久間兄弟カ石何方へ落たう
けんとの行末と知ののすゝ去とも霧坂の城と取ゝゝるおのむ
さと大谷慶松中川平右衛門蜂屋出羽守塩川伯耆守羽柴三左衛門
尉連署しとゝれと注進したうけしゝゝ秀吉卿ゝう三左衛門尉以下へ御
書と賜とうとゝ動功を賞とゝゝゝゝ且又四方ゝ下知ゝて法印をゝゝ佐久
間下掛カ石の行衛と尋らゝとゝ重修眞書太閤記九編卷之十四終

重修眞書太閤記九編卷之拾五

大坂御城普請の事 并四大ユ棟梁御尋の事

北越平均の後も秀吉ゝゝ山崎宝寺ゝ御座ありて
熟考るゝゝゝ足利将軍十四代の間禁裏守護のゝめ
京都ゝ御所を經營ありて日本六十餘州の大小名
と參勤をゝめゝゝとゝゝゝへとも應仁の大亂ゝりゝ
のゝゝゝ關東關西麻の如く亂と自然と大番勤仕も
怠慢とるゝ至る是ゝ於て織田殿尾州ゝり起らと
ゝゝ朝廷の宣旨ゝ違ふ輩と征伐ゝゝゝゝと淺井朝

倉とくらゝの武田勝頼上杉景勝別所長治毛利輝元等あり猶いまゝ武威陸奥出羽に及ぶ四國九州二嶋の外に普ねく秀吉その志を継ぎ中國西國を處置しもうん爲に摂州石山の地に大城を築きもつて是に故右大臣殿の思召立ひろう車いまゝ成就なりしをもつて天正十一年七月ふ車始あるべき數千万の工匠を集め作事といとをもふ程に不日に修築出來し吉日を撰て移徒あり抑秀吉今年四十八歳下元の陽男なり光を以て游年とし乾に生家離に天醫艮に絶体巽に游魂坎に禍害坤に福德震に絶命とぶく山崎寶寺より大坂に坤にあ

たり即福德の方にあり此東成郡石山の地にむかし篠崎樫山と云へる處にて生玉大明神の社地あり〻と明應五年七月本願寺八世蓮如上人の時に寺〻に僧坊を營築ありて十一代顯如上人の時まで住居あり〻なり生玉の社僧南の方曼陀羅院櫻本坊眞藏院持宝院地藏院遍照院覺圓院觀音院あと十ケ院あり〻と秀吉むかし〻木下藤吉郎といひし時此地を見たて信長公へ言上しけるに信長公もいまゝ吉法師と名乗ひし頃此邊を游覽あり〻いうふも然るべしと仰らるゝ即使者を以てこの地を乞求めひけ

るゝ顯如上人ゝ之と否とみひしゝゝゝゝ終ゝ軍勢
とさゝ向合戰數年ゝ及ふとゝへとも門徒の僧俗
男女且那とも一命を棄て防ぎ戰ひけるゝへ東ハ
沼ゝゝゝ葭葦生ゝけゝ又北ハ湖水の流をうけゝ
淀川ふゝゝ西ハ博勞の渕ゝゝ難波の海原遠く南
一方ハ平地なゝされハ僧坊ゝとゝへとも自然
と備ゝる要害ゝひとハ數日戰を挑めとも寄手い
つも敗北ゝひるゝ故ゝ内々信長公ゝゝ奏聞ゝゝ
ひるゝゝゝ正親町院の天皇本願寺へ勅使を下さ
ゝ近年信長と矛楯ゝ及ひ合戰度々なるゝゝ叡聞
ゝ達ひ車の起と尋ぬるゝ信長帝都守護のゝめ石

山とゝて城塁ゝふさんと乞求めゝゝ蓮如の旧跡
とゝゝゝとゝて與えるゝ故とゝめ抑蓮如の臼跡
石山一處ゝゝゝ加之朝家の御為ゝゝい信長
ゝ所望ゝ任をゝ其地を與えゝハ王室への奉公ゝ
ゝ忠勤ゝゝ且ハ戰場ゝ死亡をゝのゝ供養のゝ
めなゝ早々その地を避渡をへゝと仰下さゝゝ
ゝゝ顯如上人神速ゝ寺を出て紀州雑賀鷺の森へ
退去ゝゝゝゝ信長をふちち此寺跡へ仮ゝ陣屋
とゝらゝ縄くゝと定めゝひゝゝとも軍多くゝて
城塁となるゝゝ及くゝびとハ天正七年の車ゝゝ然
るゝ同十年六月二日信長公京都本能寺ゝ於て明

智う為ゑ御傷害ありその頃秀吉ゑん播州姫路を
ゑて居城とゑすゝめひしゝなり然るゑ秀吉山崎の一
戰ゑ明智を滅ゑ十一年柴田を討て北國を平げ
いよゝ帝都の守護を第一の勤となりゐんげるゑ
宝寺ハ禁内狹小にして日本國中の大小名を引付
へき處ゑあゝび姫路ハ帝都をゑること三十六里を
てゝ遠し是ゑ於て信長公へ勸め奉りし石山ハ京
と去こと十二里といへとも夜舟の便宜ありまゝ上
古難波の津の旧跡なるゝハ西國中國四國ゝかそのの
便と得たりゝゑ增る地あるへゝうゝびとそさて
ゝと普請ありしゝ奉行ハ淺野彈正少弼長政

增田右衛門尉長盛なり叔番匠の棟梁と吟味あり
けるゑむりし聖德太子ゝめて尾背の法又ハ虹
梁蝦股枡規矩組の曲尺と定めゐひし時四人の大
棟梁あり多門武辻金剛中村といゑ武辻金剛ハ四
天王寺ゑ住し多門中村ハ大和國の法隆寺ゑ住を
あるこゑ依て秀吉卿ゝの四人と召出しゐひけるゑ
武辻金剛両人ハ本願寺の門徒なるゝ故ゑ石山ゑ
籠城しけるゝ顯如上人ゑ從て四天王寺と立退し
とて行方とゝらびゝ然ハ多門中村をめとて召出
けるゑ中村ハ法隆寺と立退代見ゑありとゝへと
もたしゝゑ其在所と知ののなゝ多門兵助とゝゑ

のの極めて老年うとなる体まして法隆寺に居たり
けるをとめ出されて城塚造営の事を仰付らるとけり
依て兵助面目を施し大坂へ参上し柱立の故實地
形縄のそろ様くそろ〳〵言上をしうに秀吉卿感心
おうて其座に於て黄金あまた賜そろ兵助の長子
兵大夫正清を御前に召て此度の普
請を仰付らるとさろ然るに兵大夫の人品骨柄大ユ
あれおしきものなりあつたを武士も及てこるを
となりと稱美あうけるふしのう兵助〳〵こまろ實
に〳〵そろ〳〵き御眼力うあ兵大夫とい兵助の實子
にあ〳〵ば兵大夫ら實父と云い三輪大明神の神人

巨勢孫兵衛巨勢正義にて件の正秀と申ハ孝元
天皇五世の孫武内宿祢の後胤ふり武内宿祢ハ四
十七歳にて景行天皇棟梁の臣となさるひ百
廿六歳にて息長足姫尊を補助新羅を征伐ふし
ゐ〳〵ふり以来六代に仕へ三百十六歳にて薨を
らしなりその宿祢の男木莵宿祢ハ紀氏の祖七男
小柄宿祢ハ大和國巨勢の里に住しとい即巨勢氏
の大祖にて孫兵衛ハその子孫なり然るに孫兵衛
松永彈正少弼久秀にたのまれ大和國乾城に籠り
し時某を呼て申けるハ我久秀と竹馬の交あつく
因て身を棄て彼と死生を共にそへ〳〵久秀ら所業

の善悪ふかくたゞ但此幼稚のものハ我子なれ
ともうつハ祖先の血脈なり我と共ニ謀叛人ニ與
力をなさるあるべく御邊ニ與ふる間子として大ユ
ふなりあへと申置てひたすら孫兵備ハ久秀と共
ニ戰死ていと其子ハ即兵大夫なり我手元ニ養
育仕う太子ようニ以來相傳の口訣秘藏の坪曲尺の
ありかく教えていへハ此道ニ取て兵大夫ふとの
者又あるへくハ存をべしと申上ていハ秀吉卿聞
食及様の筋目といひ人品といひ日本第一の名城
と築く大棟梁となりて不足ふとて悦ひあひゆう
て我むすの名字なりとて多門兵大夫と改め中

村大隅掾正清となりひ然日あるべく堀塀
櫓門天守をへて經營成就つるハ昔本願寺たり
し時の形容いとつる大手土橋の前の井戸のミ
なりとうや此井ハ蓮如上人の堀あひし處なりと
て蓮如水と呼うとなりそもあり生玉明神を西成
郡ようつさゝ南の坊とらめ十ケ院ハ天王寺領
ようて寺地を與えらるとなりこれハ今も猶本
町筋の地中丈餘の所ようニ五輪の石塔を堀出ひと
あるハ寺院の跡あるハなり
生玉社ハ東生郡ようて大坂ようニ已午ふ當う天
王寺筋の北西なりう社領二百石社地三町四方別

當と南坊とゝふ眞言宗あり神主い松下氏祭る
處い天孫瓊々杵尊ゟ從て降臨あり一三十二神
のうち天活王命あり新田部直の遠祖とゝや活
王と申ハ即活魂なりいくとゝいうと云辭と同し
うとハ西土ゟて生と云字の義ゟ當る物とうゝ
ふを心あるうゝこふを心あるとい單ゟなりとも云
されハ此神いまハあるゝ故ゟ成の郡といひ
と後ゟ東西ゟとうてるなり又其子孫ゟ新田部
直あるも土祖のゝくを一業と繼て生成を勤め
しゝ故とゝらる祢宜巫十六戸社僧十院あり
織田信雄内大臣ゟ昇進の事

并四人の老臣評定の事

大坂の城經營とゝろ秀吉卿とゝゝありてのち
天守ゟ上らとゝひ四方と御覽ありてのち安國寺
とゝひ松浦法印とめさゝ仰出されけるい桓武天
皇平安城と築さゝひしのち比叡山と草創ありて
鬼門の鎮守とふしあふと聞う然い當城ゝも鎮護
の靈場と建立をゝやとおのゝなり各存寄をつゝ
ゝひ申されいへとありける時両人一同ゟ言上し
けるい北方い陰ゝて水ある水の精凝て石とふ
う石の精凝て鐵となるされい磁石い石の精ある
う故ゝその子の鐵を引力あり因て刀劍の類を北

に向ると忌といへり今君がの名城を築きあひ万
代太平の鎮守あさをんとの思召ひたち正八幡
宮と北向に御勧請あり て然るべうんと存ひと
申ふり秀吉卿も尤の事と思召即生王の八幡
宮北向に御勧請あり けりそのうち伏見やすい安
土あるひは京都ふり町人ともと呼下さるし故伏
見坂町伏見両替町伏見町安土町京町ふとふ處
あり王造り口雁木坂の南山帰来畑とふ處を筭
用場といふは大坂経営の時仮屋を立られ諸職人
の筭用をあつる處あり四〜て秀吉卿城外を巡
見しあひけるに城南五町ところに小橋あり その

小橋ふりあふとに清水谷といふ處あり その清水
を汲て御茶に用ひあひしとかりとい城内に堀
あひし井戸あまたあるとも茶にあひて天守臺下
に堀らをられし井に黄金を多く沈めあへとも
とろ〳〵水性重くして清水谷の水に及ばざりけ
清水谷に茶室を立られ千利休に預けあへしとふ
う利休ふの處に櫻を多く植しかへ今に櫻町とい
ふその御茶室の北に一宇の梵刹あり安泰寺とい
ふあひしに安國寺の弟子の僧ありけるに安國寺の屋
敷に今農人橋筋百軒屋敷の呼あり又本町上三町
谷町ふり東ふの處道あり故福嶋左衛門大夫正

則承てうて此道を作るゝて今も大夫殿坂といふその横町より弓頭衆七人住居しける故其處の名と御弓町あるひハ七軒町といふ筒井う居たうし屋敷跡と順慶町といふ堀久太郎う屋敷跡と久太郎町といふとのへう片桐市正屋敷の跡ハ片桐町今ハ片町といふ其頃無雙の名城すして四國九州中國への便宜よろしけるとハ自然とその處繁昌しつゝハ柴田滅亡し三七殿生害ありしのち天下の勢まさとのつゝ大坂より來集して事とゝうる様よあうけるるよう尾州清次の信雄卿ハ有ても無ろ如くよそまゝほしけう信雄卿今年ハ廿六歳正し

く右大臣殿の二男ゝして三位中将信忠卿同腹の弟あるとハ天下ハ我身のものとおもひけるよ三七殿と柴田瀧川たをけ奉うけるふうう信雄卿ハ只打あのらもしておそしける處よ柴田ひうひしうハ必定天下の大小名清洲へ參上して大將軍と仰奉るあうんと心のうちよ頼ゝおのゝとしよ秀吉の威勢日々よ增月々よさうんのうしと信雄卿よもふかゝ憤うゐへとも結句織田家重恩の侍ともゝ秀吉よ帰伏しける体あうけるふうう信雄卿何とそして秀吉を滅しその領地と合をその威權を逞しくをゝやとれのひ立ゐくそ是非もあゝ然るよ

秀吉卿ハ三法師殿と元服をさせ奉り従三位の中納言よふ〜奉り濃州岐阜の城よ移〜奉り御領ハ三十万石と定め奉りける由と聞て清洲の家老瀧川三郎兵衛信雄卿よ申けるハ此度いまゝ幼稚の三法師君よ元服官位を執行ふひ一城の主とふ〜奉るゝ君よハ何とゝ思召ひや秀吉の本意天下の權と握ひよ幼稚の主君よよ〜まをしハ何事も秀吉の申行よ〜ゆゑ〜なるべ〜いそんや任官叙位ふ〜ふ上ハ自然と朝廷の威をかるゝ〜ひ爰許ふハ御位階も早く御官爵も輕〜やう〜まをしいふ〜以て無沙汰よ万事と取計ら〜よ〜ゝき事と覺ひ早く御分別

ふ〜ハ信孝卿同様よふ〜ふらをゝよ〜〜ひと申ける
よふ〜信雄卿實のとゝ〜ゆ〜きふハ家老勢州
松嶋の城主津川玄蕃允尾州星崎城主岡田長門守
同〜〜所安賀の城主淺井田宮丸等と招き相談よ
及ふれけるよ津川玄蕃允進ミ出て申けるハ當今
秀吉の威勢故右大臣殿よもやさりぬ〜覺えひ
その上故殿ハ人と疑ひゝ〜ゝ御心深〜うつ人と侮
うゝ〜ゝ御本性よハ〜ハ譜代相傳の人さへ勿体ふ
けとも疎ミ奉る人もひひ〜ゝ然るよ秀吉ハ智謀
ふう〜人と懷ひ術を得ハ故一度その旗本よふ
うひの實よ厚く親〜ゝひと累代重恩の人とお

しくゆへハ是と傾けゆ事急なりつゝくゆま
う其上故殿の御仇を一番ゑ報し奉り大功その
次ゑ御葬式以下莫大の費といとゝ執行ひと天
下の人心を得ゆ上といへ朝廷の御覺も厚くゆを
柴田嫉しとおいふ處あり無名の軍を起し身を亡
し國と失ひゆ先車の戒あり後車何そおもとおの
くさるへけんや然ハ時節を御待あらいその自ら
倒るゝ期もあらとう無らさらんと申けると聞て淺
井田宮丸何さま津川殿のいとるゝ如く元龍悔あ
うと申ともゆ秀吉卑賤より出て今從四位下ゑ叙
し參議ゑ任とあまりの昇進と申へしさるい是ゑ

う驕奢ゑ長しゆて自然と今ゝそ懐ゝ良家の大將たち
見限りて反逆を企るものもゆへし左様の時ゑ乘じて車と御計
うゆゝゝ安くしてゝゝ成就仕るくゆゝやうたゝ御過あるく
くゆと申けるを岡田長門守聞をゝう良久しくして申ける
へ津川殿の申さるゝ処淺井殿の議論やうとの理明うゑ聞
えゆゝるゝ退く愚案と廻らしゆる當今天下の大將軍
へ中納言秀信卿ゝて御後見ハ此方様ゑゆ秀信卿ゝまゝ御幼
稚ゑまゝ年ゝ文十五るも成をゝゝ御後見も止めくへく
左とゝハ自然と當方ハ諸將の上首と申ゝうう臣下の列
ゑ加ゝうゝゝゑ只今のうちゑゝ御官位御昇進
ゆ様御ゝうゆゝん故大臣殿の御先途ゑゆへゝ大臣ゑ御進

ミはそんとハ何の子細もはましくは左もれハ大臣の官を
以て秀信卿よりも上座に着給ハヽ秀吉とハ抜群相違に
は此義いかゞはそんらんと申けれハ瀧川三郎兵衛何さま至極
の妙計なれは此方ハ北畠の御家督なれハ間准三后一位太政大臣
にも御先途ハ上に御實方に近く右大臣殿おゝしまさは
早々御工夫はへしと申けるにより四人の評定一変し瀧川
三郎兵衛ハ京都に懇意のもの多くことに久我中院家ハ
北畠一流の源氏なれハ親しかりけるにより瀧川三郎兵衛
を使として上京をしめ黄金絹布をおしまず傳奏議奏
に就て申上しらハ中納言大納言を歴て正二位に叙し
内大臣に任し給ふへきと旨宣下あり但任大臣の拝賀大

饗宴等の式本國にて行ひへきため勢州長嶋に移り給ふ八織
田家普代の諸将を召集められけるにより長嶋の賑ひいふに
くらりなし此おもむき大坂へも申来りけるにより秀吉卿に
不日に長嶋へ参向あるべき由を答へ給ひしかハ瀧川三郎兵衛
内大臣殿に申けるハ時ハ得かたく失ひやすしと申は秀吉御
歓ひとして参上いたしはそんらん御前に於て打果し申へし左も
はそんらは天下何のものか御下知を背き申へきやそとて三家老衆へ
も御評定然るへくはと勧めけれハ内大臣殿大によろこひ
給ひハ三家老にその由を仰出されけるにより何れも尤然る
へくはと同心しけるにより森勘解由成之飯田半兵衛直昌
両人を討手に定められたりけるとて又秀吉卿ハ長嶋の使をうけ

ゑひ耶刻參上とへさ由と答へゑひ然〻てのち内大臣信雄の浅智すゝへ能おのひ付迚さり但拜賀大饗等の事ゑゝう某と打果さんとハ至極の如計ふり行もへハ主従の禮を乱るといひ立ん謀ひう但秀吉すさ見と破る術ハう見ゝゑハ人々ゝとて加藤福嶋片桐脇坂ゝ密計ハ告示し〻そゝこゝう先陣ハ堀尾茂助二陣ハ蜂須賀彦右衛門三陣ハ旗本衆跡備ハ浅野長政都合その勢六万余人長嶋の城下一宇ものとさハ旅宿の札ゝ打堀尾吉晴ゝ使とゝて進物を獻り明朝參上御歓ゝ申上へ〻とゝ言上あり

重修眞書太閤記九編巻之十五終